

田坂敏雄 著

『熱帯林破壊と貧困化の経済学』

——タイ資本主義化の地域問題——』

御茶の水書房 1991年 v+279ページ

竹田 晋也  
河野 泰之

I

昨年ブラジルで地球サミットが開催されたこともあって、「地球規模」の環境問題、特に熱帯林をとりまく問題が、連日のようにマスコミを賑わせた。

「地球規模」の問題というが、実際にはそれは、各国、各地域の個別の問題の集積に他ならない。それぞれに固有の顔をもつ問題を「地球」という大きな枠組で捉える場合、問題が一般化、均平化、単純化されてしまい、かえって解決の糸口をも見失ってしまいかねない。重要なのは、「地球」全体を鳥瞰しつつ、対象とする地域に固有な問題を深く掘り下げていくことではなかろうか。地域研究の今日的な課題のひとつもこんなところにあるのかもしれない。

しかしすさまじい速度で変貌してゆく現実を目の前にすると、広く深く問題を分析することがいかに困難であるかが、改めて実感される。時間をかけてひとまずの分析を試みても、その結果が得られた時点では、すでに現実の方がすっかり姿を変えているのである。

本書は、その困難に正面から取り組んだ著者の労作である。「早産の誇りを恐れつつも、問題の今日性を鑑みて、あえて公表する」と著者は「あとがき」に謙遜しつつ記しているが、同時代の問題を正面から追求してゆく著者の姿勢、短期間に多大な資料を整理し、全体像を構築する努力など本書にはその内容以前に教えられるところが大である。

タイでは、過去30年間に森林面積が半分になった。国土のおよそ30%の森林が消失したのである。このことは特に東北部で顕著であった。本書は、この「熱帯

林破壊」と「貧困化」を「資本主義化の地域問題」として論じており、次の5つの章で構成されている。

- 第1章 農村過剰人口と森林破壊
- 第2章 森林破壊と生態系の攪乱
- 第3章 林業資本とエンクロージャー
- 第4章 EC共通農業政策とタイのタピオカ産業
- 第5章 土地なし世帯と貧困の諸形態

まずは、著者の言葉を借りつつ、内容を概観したい。

第1章では、森林破壊の現状が分析された後、その主要な形態が「農村住民による人植形態での換金作物栽培」であることが確認される。そして「農村過剰人口の形成と彼らを『不法侵入』させているメカニズム」が問題であるとする。第2章では、森林破壊が生態系を攪乱してゆく実態が塩害・土壌侵食・干ばつといった側面から探られている。

第3章では、「森林局と林産公団による過剰伐採、ユーカリ植林に伴う森林生態系の攪乱とエンクロージャーの諸問題」が分析される。続く第4章は、「タイ農村の国土の切り売りの上に成長」してきた「ECにおける配合飼料産業と食肉生産」の分析から始まり、「産業論としてタピオカ産業の現状分析」と「地域論としてタピオカ産業に包摂された農村と農家の諸問題」が検討される。以上、第3章と第4章では、「資本による農村包摂と農村社会の攪乱」の実態が明らかにされる。

第5章では、前章までで明らかにされてきた「自然と社会の再生産の危機の総結果」としての「土地なし世帯と貧困の諸相」がまとめられる。

本書では、以上のようにタイの東北部を主な対象としつつ、「熱帯林破壊」と「貧困化」が論じられる。そこで著者が実証を試みるのは、「地域社会の再生産が自然の再生産を攪乱し、そのことによって自然の物質循環の一環に組み込まれている社会の再生産そのものが危機に陥っていること、そしてこの社会的危機は、この国の資本蓄積様式のそもそもの『原罪』ともいべきものであること」(277ページ)である。

農学を専攻する評者らは、もとより、経済学者である著者の労作を的確に評する能力を持ち合わせていない。とはいえ、同じようにタイの農業や林業、土地・水利用、さらに環境問題に関心を持ち、かつそれらが

内包する諸問題を解決するためには学際的な研究協力が必要であると認識している。しかし現在のところ、研究者間で、あるいは研究分野間で、近年タイにおいて進行している事実としての実態とそれに対する認識あるいは評価に大きなばらつきがある。

そこで、以下に評者らが認識している実態と問題の所在を述べたい。

## II

19世紀末、米需要の増加を契機としてチャオブラヤ・デルタの水田は急拡大した。この水稲栽培を支えたのはタイ東北部からの出稼ぎ農民である。彼らは水稲作期を通じて中央部に滞在して農作業に従事した後、旧暦3月の月が満ちだして3日目には毎年帰郷した。その人数は定かでないが、当時ランシット地区に属していたタンヤブリ県だけでも数千人の農民が東北部から出稼ぎに来ていたという。また北部での木材搬出やバンコク—コラート間の鉄道建設においても多くの農民が東北部から出稼ぎに来た<sup>(註1)</sup>。1960年代に始まる工業を中心とするタイの経済発展は再び東北部の農民をバンコクに誘い出している。とりわけここ数年の変化は顕著である。若者はもちろんのこと、家族を持った働き盛りの男たちでさえ見つけ出すのが困難な農村が東北部で見られるようになった。このような出稼ぎの急増時期は一見、東北部の村々に繁栄をもたらす。さしずめ今ならカラーテレビでありバイクであり冷蔵庫である。しかしそんな商品が氾濫している村ほどどこか活気がない。村に残っているのは老人と子供だけだからである。この100年間ほどの東北部を見ると、出稼ぎで儲けるいい機会をつねに虎視眈々と狙っている農民の姿が見えてくる。

しかし一方で農民はそれぞれの村での生活基盤を築く作業を永々と続けてきた。出稼ぎによる繁栄は彼らが望もうが望ままいが一時的なものでしかないからである。その過程をコンケン県のD村を通して見てみよう<sup>(註2)</sup>。D村はチー川氾濫原から南岸の丘陵へ上がったところに位置する。水田はおもに村北側の氾濫原に分布し、丘陵では現在はキャッサバが栽培されている。この村の周辺に人が住みだしたのは19世紀の後半とい

われている。彼らはチー川下流のロイエット県から数家族で移住してきた。氾濫原には微妙な起伏があり、低みは雨季には自然に湛水する。彼らは草木を焼き払い豪雨時には排水できるよう排水路を掘削し徐々に水田面積を拡大していった。灌漑はなく天水にのみ依存しているとはいえ地形の傾斜にしたがって自然と雨水が集まるので、干ばつによる被害は小さく比較的安定した収穫が期待できた。この時期、D村は新たな開拓移住者を迎え入れた。ところが1930年代になると新たな開拓移住者を迎え入れることはなくなり、逆にウドン県やコンケン県西部へ村人が農地を求めて移住するようになった。D村周辺では集水面積の大きい水田適地が開田し尽くされてしまったからである。その後も水田面積の拡大は細々と続けられたが、それらは集水面積が小さく干ばつによる被害を頻繁に受ける水田である。この間、そして現在に至るまで水稲作の単位面積当り収量を増加させるための栽培技術の改善はほとんど見られない。正確に予測することが不可能な雨水に依存しているために、湛水の動態も収量も経年的に大きく変化するためである。

このようにD村における水田面積の拡大は1950年代にすでに頭打ちとなる。単位面積当り収量の増加も見られないためにそれ以降は平均的な米生産量に大きな変化はない。1950年頃にはすでに現在の水田の85%が開田され高みの疎林のみが残されていた。D村でまとまった面積での畑作が営まれるようになったのはこの時期である。最初の栽培作物はケナフであった。従前、水稲栽培には利用されなかった高みの疎林が焼き払われ畑作が広がった。1950年代後半から60年代にかけて東北部では急速にケナフの栽培面積が拡大した。この拡大は当時の東パキスタンからのジュートの輸出不振のためにその代替物としてケナフに対する需要が増大したことが刺激となっている。しかしD村で見える限り、低みから高みへの水田拡大のまきに延長上に畑地造成がある。在村のまま農業生産を増加させる唯一の方法が水稲作の成り立たない高みの開畑だったのである。ただケナフはD村の自然条件下で栽培可能でかつたまたま有利な商品作物であったために、その栽培は大部分の農家にとって重要な現金収入源となった。しかし1960年代後半になるとケナフの価格は下落し、70年代

になると栽培作物はケナフからキャッサバに変化する。その時点でより高収益な作物に乗り換えたのである。とはいえD村では水田面積が農家1戸当り約2畝であるのに対して畑地面積はその5分の1と小さく、キャッサバ栽培は農家の収入のわずかな部分を占めるにすぎない。そしてその頃から近郊の地方都市やバンコク首都圏さらに海外へ働きに出る村人が増え始めた。水稲作と同様、畑作についても単位面積当り収量を増加させるための栽培技術の改善や栽培作物の多様化はほとんど見られない。降雨量と潜在蒸発散量の差がさして大きくない上に土壌の保水性が小さいために干ばつ被害を受けやすいのに加えて、土壌の肥沃度が小さくかつ肥持ちも悪いからである。畑作にあまり適していないこのような条件下でもある程度の収穫が期待できたのがケナフでありキャッサバであったのだ。ただし畑地の傾斜が緩いため表土の流亡は小さく、土壌侵食によって耕作を放棄せざるを得ない状況に一気に追い込まれることもない。

東北部では水稲作に関しても畑作に関しても集約化のための技術改善は顕著には実現していない。その結果、農民が農業生産を増大させ確固とした生活基盤を築くためには、森林を焼き払って農地面積を拡大することが唯一の選択とならざるを得なかったのである。

### III

外延的農地拡大の結果としての「森林破壊」は、タイのみでなく世界の各地で現在進行しており、また歴史の上で幾度も繰り返されてきた。地中海沿岸にはげ山が広がり、ヨーロッパの森が消え、アメリカのフロンティアが西部へ向かって漸進してきた。巨視的に考えると東北部におけるEC向け飼料＝キャッサバ生産も、こうした長い歴史の一コマのようである。こうして見ると、東北部で近年、そして現在も進行している「森林破壊」は、本書のいう「資本主義化の地域問題」といった枠組を越えた、人類の歴史の中で不可避な事象であるようにも思える。

ただ森林は一方的に「破壊」されるだけではない。規模の大小は別にして他の地域同様に東北部にも、内発的・自発的に保全・再生される「森林」を見いだす

ことができる。

東北部の中でも比較的古くから拓かれた水田地帯を訪れると、水田に残る産米林、村の社が祭られた鎮守の森（ドーン・ブーター）など意外に豊かな緑が残されているのに驚かされる。

ヤソトン県のある村では、古くからフタバガキ樹脂を塗布した防水籠を作ることを副業としており、村の中や周辺の水田中に樹脂採取のためのすばらしいフタバガキの大木が聳えている。ブリキやプラスチックのバケツが普及する以前の東北部では、この防水籠が水汲みに広く使われていた。今でも市場で魚籠として使われているのを見かける。

同県では、ラックの生産も盛んであった。地元出身の小説家カムブーン・ブンタヴィーが著した『東北タイの子』にラック取りの場面が出てくる。そこに登場するラックを飼う木「チャムチャー」、すなわちアメリカネムノキは、現在も村々に多く見られる。この木は名前からもわかるようにタイの在来種ではない。南アメリカ原産で今世紀の最初にタイに導入された樹種である。北部を中心にタイ全国に植栽されて、今では在来種と見間違ふほどで、特に北部には、アメリカネムノキの森に覆われたような村々もある。アメリカネムノキは外来種であるので、森林法の伐採引規制の対象とならない。本書でも触れられている森林伐採権の停止の後、木材価格が上昇する中で、ラック宿主木のアメリカネムノキの一部は用材として市場に出回っている。農民自らが植栽し、長年にわたり利用・保育してきたアメリカネムノキ林から用材が生産されているのである。

「森林」という言葉は、「森」と「林」に分けることができる。「熱帯林」の中にも、自然のままのうっそうとした「森」と人の利用が重なる「林」のふたつの要素が考えられる。「熱帯林破壊」が進行する現在、残された「森」の保全に努力する一方で、利用されることで保全される「林」の再生が必要のように思われる。「森林破壊」のすさまじさのみに目を奪われるのではなく、多様な森林利用の形態・人と森林との関り合いを見つめることの中から、東北部の森林の今後の展望が見いだせるのではないだろうか。そしてその中に地域の自立化の方策が見いだせないものであろうか。

## IV

さて書評の場を借りて評者の勝手な思いを書き連ねてきたが、本書を読みながらふと、東北部の農民がこの著書を読んだら、どのような感想を抱くであろうかと思った。「良い田を求め」(ハー・ナーディー)、「良い畑を求め」、「良い仕事を求め」で自給水稲作から商品畑作、そして農外就業・出稼ぎへと生活の基盤を変えつつ逞しく生きてきた農民の眼に映る「熱帯林破壊」と「貧困化」とはどのようなものであろうか。したたかな生活者であるイサーン農民は、著者に問題

解決の方法を尋ねるのではないだろうか。本書の現状分析を踏まえた著者の問題解決への提言を聞いてみたいと願っているのは、評者だけではないと思う。

(注1) Johnstone, D. B., "Rural Society and the Rice Economy in Thailand 1880-1930," 未公刊論文, 1975年。

(注2) D村での調査についてはすでに多数の報告がある。その代表的なものは福井捷朗『ドンデーン村——東北タイの農業生態——』創文社 1988年。

( 竹田：京都大学農学部講師  
河野：京都大学東南アジア研究センター助手 )